

# 三好市の板碑

考古班（徳島考古学研究グループ）

西本 沙織<sup>1</sup> 岡山真知子<sup>2</sup>

**要旨：**三好市域の板碑はこれまで1基のみが確認されており、現在確認されているなかでは県内最西部に位置する唯一の板碑である。今回はこの板碑について、現地での所在確認および採拓等を行った。調査の結果、阿波型板碑では見られないような薬研彫りの異体キリークを主尊とする阿弥陀種子板碑であることがわかった。これは板碑が少ない県西部に限らず県内においても非常に特異な例である。来歴は不明だが、武蔵型板碑の模倣や搬入などの可能性を検討する必要がある。

**キーワード：**阿波型板碑、異体キリーク、蓮座、武蔵型板碑

## 1. はじめに

板碑とは、中世に造立された石製塔婆のことである。結晶片岩（青石）製の板碑は武蔵地方（現在の東京・埼玉・神奈川の一部）に集中的に分布しているが、阿波地域においても武蔵地方と同様の整形板碑が分布すること<sup>1)</sup>は古くから知られてきた。これまでの研究によって、素材となる結晶片岩の産出する吉野川中・下流域および鮎喰川・園瀬川流域には多くの板碑が分布していることがわかっているが、吉野川上流域ではその数は非常に少ない<sup>2)</sup>。三好市域の板碑については、これまで『池田町史』などによって1基のみ存在が知られていた。板碑の空白地帯である吉野川上流域に分布する唯一の板碑を調査することは、中世阿波の板碑文化を研究する上でも意義深いと考え、今回の三好市における調査テーマの1つとした。

## 2. 三好市における板碑の調査

### 1) 調査の経過

調査日 2018年4月29日（日）、

2018年8月26日（日）

調査者 岡山真知子、西本沙織

調査協力 細田義秋（三好郷土史研究会）

内 容 『池田町史』等で確認されていた三好市池田町州津谷奥の板碑1基の所在確認調査および計測、採拓、写真撮影を行った。

### 2) 州津谷奥の板碑

この板碑は三好市と東みよし町の境である三好市池田町州津谷奥に所在しており、県内でも最西部に位置する板碑である。所在地に関しては図1に、内容に関しては表1に示した。昭和58年に刊行された『池田町史』<sup>3)</sup>では池田町州津谷奥の板碑として記載されており、その梵字や形態から、鎌倉時代のもものと推定されると記載があり、旧井川・三好町以西ではこの板碑が唯一のものとされている。町史によると、この板碑が所在する地点は、旧三好町（現在の東みよし町）と旧池田町（現在の三好市）の境の西谷の奥で「龍王の滝」という滝があり、別名「不動の滝」ともいうとある。かつて白蛇がいて、病気を治したりするなど霊験を示すので、不動尊などの石造物をまつっていたようだ。終戦後、長尾光容師

1 徳島市教育委員会 社会教育課

2 徳島考古学研究グループ

\* 〒770-8571 徳島市幸町2-5



図1 位置図（番号は表1に対応 国土地理院「阿波池田」1／25,000）

がここに大聖歓喜天・文殊菩薩をまつり、「真言宗多聞院別院」として断食道場や緑のセンターの民宿宿坊を造って信仰を集めていたが、2000年代に無住となった。道路入り口に建つ民家も現在は空き家となり、滝付近までの進入路も荒廃し、車両での侵入は困難である。滝の周囲の岩盤には現在も多数の石仏や灯籠が安置されたままで、かつて滝行場であったことがわかる。しかし、滝の参拝所手前の石造物の覆屋や小屋は完全に倒壊し、その残骸が散乱しており危険な状態である。板碑は滝つぼに近いところに立て掛けるようにして安置されており、町史などかつての調査時と位置は動いていないようである。板碑の特徴について以下で説明する。

板碑の法量は、残存高59.5cm、最大幅30.5cm、厚さ3.5cmである。頭部の一部が欠け、下半も欠損している。欠損のためか、現状で表面に銘文は確認

できない。石材は点紋のある緑色の結晶片岩である。

まず、梵字はしっかりとした薬研彫りのバランスの良いキリーク（阿弥陀種子）b類<sup>4)</sup>であり、光背はない。キリークは碑面いっぱいにとっしりと大きく薬研彫で刻まれる。キリークはイの末端が反転するが、命点は確認できない。カの1画がクサビ型である。

蓮座は反花も含め全体が彫り込まれている（＝線刻表現ではない）。ただし、薬研彫で刻まれた梵字とは異なり、蓮座はやや彫りが浅く、断面は薄い半円に近い。このため、見た目でも梵字より蓮座のほうが薄く見える。蓮肉については線刻で表現されているが、蓮の身の粒の表現は見えない。蓮座の形態としては扁平ではなく、やや縦長な点も特徴的である。蓮座が線刻ではないという点は阿波型に見られ



表1 三好市の板碑

No.	所在地	高さ	幅	厚さ	二条線	杵線	標 識	銘文	文 献
1	三好市池田町州津谷奥	59.5cm	30.5cm	3.5cm	有	無	阿弥陀一尊種子 (異体字)	なし	『池田町史』1983

る蓮座との共通点でもあるが、梵字に劣らず大きな蓮座は、県内ではほとんど見られない。

二条線は比較的浅い線刻で、額部の彫り出しはない。側面が両方とも欠けているため側面にまで二条線の刻み目が及んでいるかどうかは不明である。杵線は確認できない。

裏面には小さなノミ痕らしき痕跡が不定方向に2箇所あるだけで、明瞭な押し削り痕はない。

板碑の所在する龍王の滝のすぐ北東方向には、中世山城である東山城が所在する。東山城は一般に南

北朝期の南朝方の城とされるが、史料に基づく推定ではなく、はっきりとした築城年代は明らかではない。『阿波志』によると、戦国期に白地城主大西氏の一族である大西備中守が拠点としたとされる。連続堀切や堅堀を多用する構造を持つ城は阿波では珍しく、長宗我部氏による改修を受けた可能性<sup>5)</sup>が指摘されている。また、南麓に位置する田ノ岡城は東山城の山麓居館である<sup>6)</sup>とされている。

### 3. 考察

隣接する東みよし町中庄には貞治2(1363)年の紀年銘を持つ大型の結晶片岩製の板碑<sup>7)</sup>があるが、自然石に近い粗い加工が施された板碑で、梵字も比較的しっかりと刻んであるものの薬研彫ではない。徳島県内全域で見ても、この州津谷奥の板碑のような薬研彫の大きな梵字を持つ板碑はほぼ皆無と言ってよいだろう。また、蓮座を持つ板碑は阿波では少数である。最も古い文永年間の紀年銘をもつ石井町浦庄の板碑など比較的大きな蓮座をもつものも見受けられるが、州津谷奥の板碑のような形態の蓮座は確認できない。

以上のことから、今回調査した州津谷奥の板碑は、武蔵型板碑が伝来した可能性がある。もちろん、武蔵型板碑と比較しても、蓮座の彫りが浅いことや背面の押し削り痕が明瞭ではないことなど、いくつかの違いも見受けられる。また、石材についても吉野川流域で産出する結晶片岩と変わりはない。このため武蔵地域から直に運ばれたと考えるのは時期尚早で、字形モデルが伝播し阿波で作られた可能性などもあるだろう。また、武蔵型板碑の編年を参考にすると、製作年代は13世紀後半～14世紀頭に収まると考えられ、県内でも古い部類の種子板碑と言える。しかし、鎌倉期の板碑が集中的に分布する石井・国府周辺から1点だけその分布が離れており、やや不自然でもある。このため、武蔵地域から運ばれたものだとしてもその時期は不明で、戦後に新興寺院として信仰を集めていたことなどから、近現代

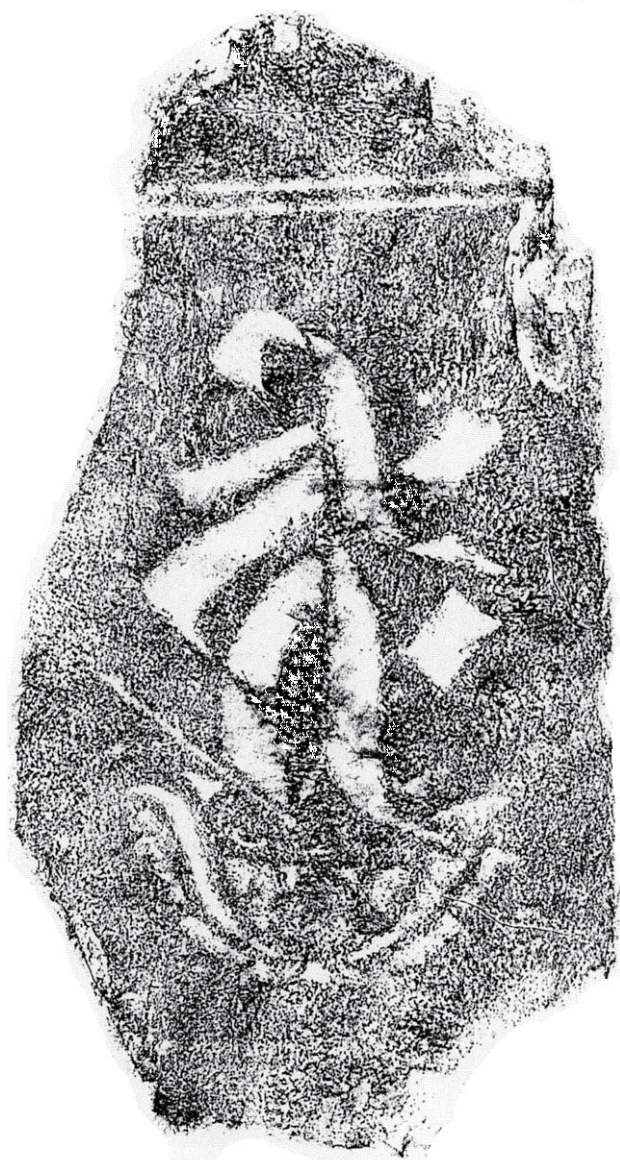


図2 拓本 (S=1/4)





写真1 左：正面 右：背面

に他の石造物と一緒に買い集められ安置されたという可能性も否定できない。この場合は歴史資料としてこの板碑を評価することは難しくなるだろう。

#### 4. 徳島県内の武蔵型板碑

ほかにも武蔵型の影響を大きく受けた、もしくは武蔵型が搬入されたと考えられる板碑に、つるぎ町半田小谷の小野寺家墓所に所在する板碑<sup>8)</sup>が挙げられる。「天正十三年（1585）道乗禅門」の銘文がある高さ42cmの小型の板碑で、種子板碑としては県内で最も新しい年号<sup>9)</sup>を持つ。裏面には横方向の押削り痕があり、種子に光背と蓮座を持つ阿波では珍しいタイプである。同墓所には他にも複数安置してある板碑があるが、これ以外は地元産と考えられ、なぜ1点だけこのような板碑が混入しているかについては不明であるが、その所在から推測すると、つるぎ町ゆかりの小野寺氏<sup>10)</sup>が関わっている可能性も推測できる。小野寺氏は、奥州宮城出身とされる小野寺八郎が南朝方につき、正平7年（1352）3月11日に南朝の将栗野三位中将から安房伊予守跡の朽田

莊地頭職を恩賞として与えられたことによりはじまり、正平年間に阿波の南朝勢力として活動したとされる一族である。長宗我部元親の四国平定時にその攻撃を受け、美馬郡一字に逃れたとされる。その後蜂須賀氏入国の際にはこれに反抗するものを平定し、南家、北（喜多）家、谷家の三家に分かれ、名主をつとめるなど武士級の待遇を受けた。『阿波志』には、小野寺八郎の子孫にあたる小野寺備中守に関して「祖某八郎蔵人と称す。陸奥宮城の人、来りて



図3 つるぎ町半田小谷の板碑（考古班2011）

海部に居る或は曰く播磨明石の人」という所伝を載せている。

また、阿波市市場町の大野寺には、阿波型にはほとんど見られない基部と背面押し削りを持つ嘉暦二年銘の阿弥陀三尊種子板碑<sup>11)</sup>が1基あり、その特徴から武蔵型板碑である可能性が高い。阿波学会でも調査を行ったが、聞き取りによると後世に持ち込まれた可能性があるものであるという。

## 5. まとめ

以上から、今回の調査によって三好市州津谷奥の板碑は県内では珍しい特徴を持つ板碑であることがわかった。武蔵地域から運ばれた、もしくは武蔵地域からの情報をもとに阿波で作られた板碑であると考えられる。この板碑が武蔵から運ばれたものだとすれば、武蔵のどの地域の板碑に形態が近いのか、そして何を背景に阿波に伝来したのかなどが重要であるが、今回はそこまで言及することはできなかったため、今後の課題としたい。

いずれにしても、この板碑周辺は現在荒廃が著しく、近い将来龍王の滝付近への進入も難しくなると考えられる。早急に何らかの保護措置が望まれる。

## 謝辞

現地までの案内および現地調査時には三好郷土史研究会の細田義秋氏に大変お世話になりました。感謝申し上げます。

## 参考文献・註

- 1) 服部清道1933『板碑概説』角川書店（1972年に再版）
- 2) 岡山真知子2001「阿波型板碑の考古学的考察」『小林勝美先生還暦記念論集 徳島の考古学と地方文化』小林勝美先生還暦記念論集刊行会
- 3) 池田町史編纂委員会1983『池田町史』下巻 徳島県三好郡池田町
- 4) 磯野治司2004「初発期板碑の種子類型」『埼玉考古』39 埼玉考古学会
- 5) 村田修三編1987『図説中世城郭事典』第三巻 新人物往来社
- 6) 島田豊彰2018「東山城」『三好一族と阿波の城館』戎光祥出版
- 7) 考古班2013「東みよし町「旧三加茂町」の板碑」阿波学会紀要 第59号
- 8) 考古班2011「つるぎ町の板碑」阿波学会紀要 第57号
- 9) 海部郡穴喰町願行寺の山越阿弥陀の板碑が天正18年（1590）という県内で最も新しい年号を持つ板碑だが、在地の硬質砂岩製であり典型的な阿波型板碑とは言い難い。また、徳島市国府町の興禅寺の六地藏板碑は天正12年（1584）の紀年銘をもつ板碑であり、結晶片岩製の板碑では県内でつるぎ町半田小谷の板碑に次いで新しい。
- 10) 田所市太1936『阿波新田氏』、福家清司1994「小野寺八郎」『別冊 徳島県歴史人物鑑』徳島新聞社
- 11) 考古班2010「阿波市の板碑」阿波学会紀要 第56号

"Itabi" the Monumental Stone Tablet in Miyoshi City, Tokushima, Japan

NISHIMOTO Saori and OKAYAMA Machiko

\* 2-5, Saiwai-cho, Tokushima 770-8571, JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No.62 (2019), pp.189-193.

